愛の友協会理事長賞

増田浩二様/静岡県/68歳/男性/無職/四歳から病気と闘っている娘にあてた手紙

さよちゃんの五歳の誕生日おめでとう。あの時のお前は、こんなに小さかったのか。いや、五歳の誕生日には入院していたのだから、クリスマスの頃はもっと小さかったんだね。「もう二度とお前をレストランには連れてこない」と怒鳴りながら、静かに泣くお前を引きずり外に出たことを、ずっと悔やんできた。

翌朝気を失って緊急治療室に入ったのだから、あの夜レストランで「何も食べたくない」とぐずったお前の血糖値は、今思えば限界に達していたのだろう。たった三十五年前なのに、子どもが糖尿病になることを普通の人は知らない時代だった。僕もお母さんも一型糖尿病という病名は初めて聞いた。病院で「いつまで生きられるか分かりません。大人になるまで生きられても娘さんの出産はあきらめてください」と言われ、体の底から力の抜ける思いだった。一型糖尿病に関しては医学的にもそんな時代だったんだよ。

でも、お前もお母さんも本当に強かったね。

お母さんは「一日でもこの子が長生きすれば医学が進歩して治るチャンスが増える」と毎日頑張った。「新しい治療法が見つかった時、お金が無くては困るから」と仕事を辞めずに毎日お前用の献立を考えインスリン注射をお前のお腹や腿に打ち続けた。お前は友だちにからかわれても、いつも「平気だよ」と笑っていた。でも、大人になってから「ほんとはね、あの頃、一型糖尿病の子だけのクラスがあったらいいなって思っていたんだよ」とお前が言うのを聞いた時、僕は何も分かっていなかったんだと思い知らされた。

お母さんの言った通り、本当に医学は進歩して、お前は二人も子どもを授かった。さよちゃんが生まれた時のお前とお母さんの笑顔は、喜びが爆発しているのに闘い終わった後のような穏やかで本当に優しい顔だった。

さよちゃんは何色のランドセルが欲しいんだろう。空に還ってしまったお母さんの代わりに僕が買うよ。